

デジタルテレビのアクセシビリティに関する予備的調査

視覚障害者による利用の現状

酒井未穂*, 松井進**, 野口武悟***, 植村八潮****

*専修大学文学部 **千葉県立西部図書館

専修大学文学部 *専修大学文学部

*lz260020@senshu-u.jp **matsui-s@library.pref.chiba.jp

takenori@isc.senshu-u.ac.jp * yashio@isc.senshu-u.ac.jp

本研究では、視覚障害者を対象とした調査を行い、デジタルテレビの利用の現状を明らかにした。調査の結果、視覚障害者の多くがデジタルテレビを利用して情報を得ていることが分かった。しかし、デジタルテレビ放送と、その受像機の音声読み上げ対応は十分とはいえず、アクセシビリティの向上が不可欠である。

Preliminary investigation about an accessibility of digital television The current status of use by visually impaired people

Mio SAKAI*, Susumu MATSUI**, Takenori NOGUTI***, Yashio UEMURA****

*School of Literature, Senshu University **Chiba Prefectural West Library,

*** School of Literature, Senshu University **** School of Literature, Senshu University

1. 背景と目的

2011（平成23）年7月から2015（平成27）年にかけて、アナログテレビ放送からデジタルテレビ放送への移行が全国で実施された。テレビ放送がデジタル化されたことにより、様々な機能が新たに利用できるようになった反面、テレビリモコンの操作がアナログ方式の時代に比べて複雑化した。健常者から見れば、複雑化はテレビ利用のさらなる発展を期待させるものとして受け止めることもできるが、障害者、とりわけ視覚障害者からするとテレビのアクセシビリティが失われるのではないかとの危惧も聞かれる。

日本における視覚障害者の数は、厚生労働省が2006年に実施した身体障害児・者実態調査結果によれば、約31万人である。その内訳は、全盲者が約9万人、弱視者が約22万人である。

テレビ放送がアナログ方式だった頃の調査結果では、全盲者や弱視者が情報入手のために最も利用する手段はテレビであった。しかし、地上デジ

タルテレビ放送に変わったことで、視覚障害者にとって使いにくくなったとの指摘[1]や、誰もが使える機会にするためにアクセシビリティの標準化が必要との指摘[2]がデジタル化初期の頃より出されている。

そこで、本研究では、視覚障害者のデジタルテレビの利用に焦点を当てて、その現状を明らかにし、デジタルテレビのアクセシビリティ向上に向けての課題を考察する。

2. 方法

本研究では、全盲の視覚障害者へのアンケート調査と、テレビメーカーへのヒヤリング調査を行った。

アンケート調査については、複数の視覚障害者団体に協力いただき、ウェブサイト上の調査フォームを用いて、デジタルテレビの利用状況について調査した。調査期間は、2016年12月18日から翌年1月15日までである。全回答94件のうち

有効回答は 91 件であった。

ヒヤリング調査については、音声ガイド機能付きテレビ受像機を開発・販売をしている三菱電機の担当者に対して 2016 年 11 月 1 日に行った。

3.結果

まず、アンケート調査の結果について述べる。デジタルテレビ放送を音声視聴している視覚障害者は、91 人中 88 人 (96.7%) だった。音声ガイド機能付きテレビ受像機を知っている人も 91 人中 86 人 (94.5%) と、その認知度は高かった。しかし、音声ガイド付きテレビ受像機を利用している人は 54 人 (59.3%) であり、認知度はあっても利用に至っていない人は少なくないことが分かった。自由記述等からは、テレビ受像機の機能への不満とともに、日本語訳テロップの音声読み上げや、緊急速報の読み上げ、データ放送の読み上げへの要望など、デジタルテレビ放送そのもののアクセシビリティへの要望が多く見られた。

次に、三菱電機の担当者へのヒヤリング調査の結果である。三菱電機は、1995 年からユニバーサルデザイン (以下、UD) の標準化を掲げて、テレビを含めた家電製品の開発を行っているという。テレビ受像機についても、全機種に音声読み上げ機能がついている。視覚障害のあるユーザーから求められた要望に応じて、「初期設定から音声読み上げができる機能」を搭載したり、2016 年モデルでは録画機能も音声読み上げ対応としたという。このように、メーカー側もアクセシビリティ向上のための努力をしている一端が明らかになった。

4.考察と課題

情報社会と呼ばれている現在、視覚障害者もテレビから多くの情報を得ている。しかし、テレビ受像機の読み上げ機能に関して、全てのメニュー項目には対応していないなど、視覚障害者でも完全に利用できるような形になったとは言い難い現状にある。また、データ放送に関しては音声読み

上げに対応していないので、視覚障害者が楽しめるコンテンツとはなっていない。緊急速報や地震速報の読み上げについても対応しておらず、防災の観点からも対策が急がれよう。

このように、視覚障害者にも必要な情報を適切に伝えていくという面では、デジタルテレビのアクセシビリティはまだ低いといわざるを得ない。

視覚障害者とデジタルテレビの今後について考えたとき、まず三菱電機のように他のメーカーでも UD を積極的に取り入れていくことが必要であろう。読み上げ機能がテレビ受像機の一機能として標準化され、どのテレビ受像機を購入しても視覚障害者が問題なく音声で情報を手に入れられるようになることが重要である。また、放送局側も、視覚障害の有無に関係なく誰もが情報を手に入れることができるテレビ放送を作っていかなければならないだろう。テレビ以外にも視覚障害者が情報を手に入れる手段はあるが、9 割以上の視覚障害者がテレビを利用している事実がある以上、デジタルテレビ放送およびその受像機のアクセシビリティを高めなければならないことは明白である。

文献

- [1]ラリー・ゴールドバーグ.米国におけるメディア・アクセシビリティ：技術革新の現在と未来.NHK 技研 R&D.2011,No.129,p.2-11.
- [2]近藤悟.視覚障害者向け情報提示技術の概要と放送への応用.NHK 技研 R&D.2015,No.154,p.4-11.
- [3]全英美,大河内直之.高齢者及び視覚障害者における家庭用テレビのアクセシビリティの実態に関する研究.電子情報通信学会技術研究報告 WIT 福祉情報工学.2011,110(384),p.7-12.

付記

本報告は、平成 28 年度専修大学情報科学研究 所共同研究助成の成果の一部である。